

小松の文芸の系譜

小松は古典文芸の世界には早くから登場しており、江戸時代には歴代藩主

が学問を大切に
にしその気風

が藩内に漲り、連歌・俳諧・漢詩を嗜む文人の育った土地柄であった。その文芸愛好の伝統は、近現代に引き継がれ今日に至っている。



小松高校に建つ北村喜八の詩碑



談笑する世界人北村喜八(右)

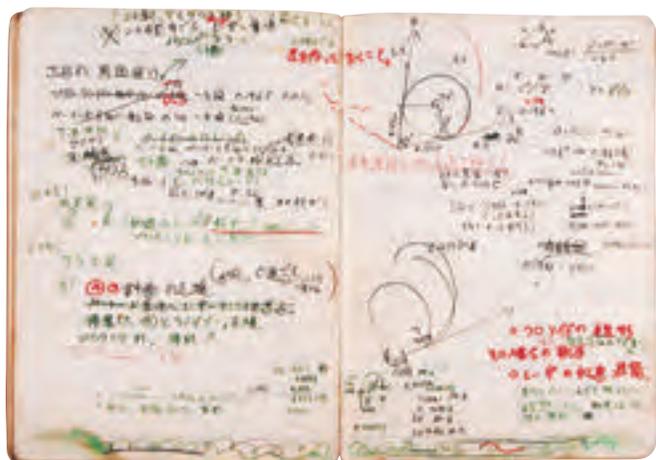
ここでは近現代の文芸を散文・韻文に分けてみるに、散文系では演劇界の北村喜八の正宗末期の活動が一人光っている。小説家が文壇に現われるのは昭和に入ってから陣出達郎・中谷宇吉郎、戦後には森山啓・谷甲州に代表される。



館山実の著作物(小松市立図書館所蔵)

韻文では明治初期に詩の分野が新しく提唱され、短歌俳句でも「明星」「ホトトギス」により革新性が叫ばれるが、

加賀地方では伝統的な俳諧を作る者が多かった。明治三十八年(一九〇五)「俳諧白峰集」が刊行され大正五年(一九一六)の一三三号まで見えるが、これは小松の近代俳諧史上特記すべき雑誌である。大正期には仏仙堂可遊・素仏・白峰庵曲池の名が残る。昭和に入り六年「越船」が現われる。その当時は森本之棗・町原木佳・大瀬飛天がいる。昭和五十八年(一九八三)仲井夜



谷甲州「創作ノート」(小松市立博物館所蔵)

潮・今井九弥により「小松俳文学協会」が発足、俳句会一六、会員二六二名が参加している。この頃、鮎山実が俳壇で活躍、注目される。

短歌では明治二十五年の「蘆城風雅」(集義堂百年記念歌句詩集)刊、大正七年の北村喜八歌集「こころの歌」刊などがあり、昭和二十七年には工清定による「小松短歌会」が始まる。昭和三十年吉田三郎により「国民文学」小松支部が結成され、今日に至る。

川柳が小松で芽生えるのは大正十年からである。起伏があり昭和五・七年の小松大火にめげず柳子が互に励まし合う様子が「ねこ柳」に生々しい。昭和九年戦時体制のため休刊、復活は昭和二十二年で現在も続いている。

敗戦の虚脱の中にいち早く文化活動を展開したのも小松の特色である。伝統ある短歌・俳句・川柳に加え現代詩グループ「山彦」も活動を開始した。とりわけ戦後の小松の文芸活動は作家森山啓の存在を抜きに語れない。公民館活動の一環であるが、森山啓の提唱

で全市民を対称に文芸作品を公募、自らその選に当り選後評を書いて「こまつ文芸」が昭和三十年に創刊され、今日まで五〇余年、五八号の出版を重ねている。全国でも希有な存在と誇る。

(金戸隆幸)



小松市の文芸誌「小松文芸」全58巻と別冊2巻(小松市立図書館所蔵)